

第59回名古屋春栄会
演目のあらまし

令和2年1月5日

名古屋春栄会事務局

目 次

翁（おきな）	1
鶴亀（つるかめ）	2
七騎落（しちきおち）	3
松虫（まつむし）	4
高砂（たかさご）	5
誓願寺（せいがんじ）	6
国栖（くす）	7
猩々（しょうじょう）	8
弓八幡（ゆみやわた）	9
蝉丸（せみまる）	10
春栄（しゅんねい）	11
小鍛冶（こかじ）	12
〔能のミ二知識	13〕

このリーフレットは、第59回名古屋春栄会の演目を解説したものです。
演目の記載順は、番組の順です。
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

翁（おきな）

【作者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穰を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」という2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齡にて。

地謡 幸ひ心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

<千才舞>

千才 所千代までおわしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

<千才舞>

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈祷なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ そよや。

<翁舞>

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

鶴亀（つるかめ）

【分類】初番目物（脇能＝唐物） *楽

【作者】不詳

【主人公】シテ：皇帝（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

昔、中国では年の始めに、華麗な宮殿で、四季の節会の最初の儀式が行われました。まず、官人が出て、御代を讃え、皇帝が月宮殿に行幸なる由を触れます。皇帝は大臣たちを従えて登場し、宮殿に着座して、群臣から拝賀を受けます。ついで大臣は毎年の嘉例により、鶴亀を舞わせることを奏聞します。池の水ぎわに遊ぶ鶴と亀は、皇帝の長寿を讃えてめでたく舞い納めると、皇帝も喜び、国土の繁栄を祝って、自ら舞を舞い、やがて長生殿へと帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

月宮殿の白衣の袂。月宮殿の白衣の袂の。いろいろ妙なる。花の袖。秋は時雨の紅葉の葉袖。冬は冴えゆく雪の袂を。ひるがえす衣も薄紫の。雲の上人の舞楽のかずかず。げいしょう羽衣の曲をなせば。山河草木国土豊に千代万代と。祝い奉り。官人駕輿丁御輿を早め。君の齡も長生殿に。君の齡も長生殿に。還御なるこそ。めでたけれ。

七騎落（しちきおち）

【分類】 四・二番目物（侍物） *男舞

【作者】 不詳

【主人公】 シテ：土肥実平（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

治承4（1180）年8月、石橋山の合戦に敗れた源頼朝は、他日を期して安房上総の方へ落ちのびようとしています。そして、一行の軍師格の土肥実平に、船の用意を命じます。ところが、いざ漕ぎ出そうとして船中を見ると、主従の人数が八人でした。頼朝は、祖父為義が九州へ落ちた時も八騎であり、父義朝が近江へ敗走した時も八騎であったことを思い出し、不吉の数だから、一人を降ろすように命じます。実平は、いずれも忠義の者ばかりで選びかねた末、最長老の岡崎義実を降ろそうとしますが、彼は承知しません。やむなく我が子遠平を下船させ、一行は親子の別れに同情しつつも、船を沖に進めます。遠ざかる陸を見ると、敵の数は多く、遠平は討死するに違いないと、実平は心ひそかに悲しみます。翌日、沖合で和田義盛が頼朝の船を捜し出し、声をかけてきます。実平は義盛の心を試すため、主君はいないと偽ります。すると、義盛はそれでは生きているか分からないと、腹を切ろうとするので、これを止め、近くの浜辺に船を寄せて頼朝に対面させます。そこで、義盛は実平に向い、遠平は自分が助けて来たと言い、父子を引き合わせます。実平は夢かとはばかり喜び、父子は抱き合います。そして一同は酒宴を催し、実平はすすめられて喜びの舞をまいます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

かくて時日をめぐらさず。かくて時日をめぐらさず。西国のつわもの馳せ参ずれば。ほどなくおん勢二十万騎になり給いつつ。たなごころにて治め給えるこの君の御代の。めでたきためしも実平正しき忠勤の道にいる。実平正しき。忠勤の道にいる。弓矢の名をこそあげにけれ。

松虫（まつむし）

【分類】四番目物（雑能） ＊男舞

【作者】観阿弥原作、世阿弥改作

【主人公】前シテ：市人（直面）、後シテ：男の亡霊（面：真角）

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

摂津国（大阪府）安倍野のあたりに住み、市に出て酒を売っている男がいました。そこへ毎日のように、若い男が友達と連れ立って来て、酒宴をして帰ります。今日もその男たちがやって来たので、酒売りは、月の出るまで帰らぬように引き止めます。男たちは、酒を酌み交わし、白楽天の詩を吟じ、この市で得た友情をたたえます。その言葉の中で「松虫の音に友を偲ぶ」と言ったので、その訳を尋ねます。すると一人の男が、次のような物語りを始めます。昔、この安倍野の原を連れ立って歩いている二人の若者がありました。その一人が、松虫の音に魅せられて、草むらの中に分け入ったまま帰って来ません。そこで、もう一人の男が探しに行くと、先ほどの男が草の上で死んでいました。死ぬ時はいっしょにと思っていた男は、泣く泣く友の死骸を土中に埋め、今もなお、松虫の音に友を偲んでいるのだと話し、自分こそその亡霊であると明かして立ち去ります。

<中入>

酒売りは、やって来た土地の人から、二人の男の物語を聞きます。そこで、その夜、酒売りが回向をしていると、かの亡霊が現れ、回向を感謝し、友と酒宴をして楽しんで思い出を語ります。そして、干草にすだく虫の音に興じて舞ったりしますが、暁とともに名残を惜しみつつ姿をかくします。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

一樹の蔭の宿りも。他生の緑と聞くものを。一河の流れ。汲みて知る。その心浅からめや。奥山の。深谷のしたの菊の水汲めども。汲めどもよも尽きじ。流水の杯は手まず。遮れる心なり。されば廬山のいにしえ。虎溪を去らぬ室の戸の。その戒めを破りしも。志しを浅からぬ。思の露の玉水の。溪せきを出でし道とかや。それは賢きいにしえの。世もたけ心冴えて。道ある友人のかずかず。積善の余慶家家に。あまねく広き道とかや。今は濁世の人間。ことに拙なきわれらにて。心も移ろうや。菊を湛え竹葉の。世は皆酔えりさらば。われひとり醒めもせで。万木皆もみじせり。ただ松虫のひとり音に。友を待ち詠をなして。舞い奏で遊ばん。

高砂（たかさご）

【分類】初番目物（脇能＝男神物） *神舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

肥後国（熊本県）、阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州（兵庫県）高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ竹杷（熊手）と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、その理由を尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

<中入>

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をする、それは奇なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

げにさまざまの舞姫の。声もすむなり住の江の。松陰もうつるなる。青海波とはこれやらん。神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。それぞ還城楽の舞。さて万歳の。小忌衣。指すかいなには。悪魔を払い。おさむる手には。壽福をいただき。千秋楽は民をなで。万歳楽には命をのぶ。相生の松風。さっさっの声を楽しむ。さっさっの声を楽しむ。

誓願寺（せいがんじ）

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：里女（面・増女）、後シテ：和泉式部の霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

一遍上人が熊野権現に参籠している時に、「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」の札を広めよという霊夢を見ます。そこで、上人は都に上り、念仏の大道場、誓願寺で御札を配ばります。すると、一人の女性が御札の言葉を見て、「六十万人より外は往生できないのでしょうか」と問いかけます。上人は、「これは霊夢の、六字名号一遍法、十界依正一遍体、万行離念一遍証、人中上々妙好華の四句の上の字をとったものであり、南無阿弥陀仏とさえ唱えれば誰もが必ず往生できる」と説きます。すると女性はありがたがり、「本堂の『誓願寺』の寺額に替えて、上人の手で『南無阿弥陀仏』の六字の名号をお書きください。これはご本尊阿弥陀如来の御告です。私はあの石塔に住む者です」と言って、近くの和泉式部のお墓に姿を消します。

<中入>

一遍上人が『南無阿弥陀仏』の名号を書いて本堂に掲げたところ、どこからともなく良い香りがし、花が降り、快い音楽が聞こえ、瑞雲に立たれた阿弥陀如来と二十五菩薩と共に、歌舞の菩薩となった和泉式部が現れます。そして、誓願寺が天智天皇の勅願によって創建された縁起を語ります。続いて、阿弥陀如来が西方浄土より誓願寺に來迎される模様などを表す莊嚴優美な舞を舞います。最後に、菩薩聖衆みな一同に本堂の六字の額に合掌礼拝します。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

ひとりなお。仏の御名を。尋ね見ん。おのおの帰る法の場人。法のにわびと法の場人の。声も妙なり称名の数数。虚空にひびくは。音楽の声。異香薫じて。花ふる雪の。袖をかえずや返す返すも。貴き上人の利益かなと。菩薩聖衆は面面に。御堂に打てる。六字の額を。皆一同に。礼し給うは。あらたなりける。奇瑞かな。

国栖（くず）

【分 類】四、五番目物（略脇能）

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：老翁（面・三光尉）、後シテ：蔵王権現（面・大飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

宮中で争いがあり、大友皇子に追われ、都を出た清見原天皇（大海人皇子）は、供の者に守られて吉野の山中、国栖まで逃げてこられます。川舟に乗って帰って来た老人夫婦は、我が家の方に星が輝き、紫雲のたなびいているのを見て、高貴な人のおいでになることを知ります。侍臣は老人に清見原天皇であることをあかし、何か召上がり物を差し上げてくれと頼みます。夫婦は根芹と国栖魚（鮎）を献上します。供御の残りを賜った老翁は、吉凶を占うべく、国栖魚を川に放ちます。すると、不思議にも国栖魚が生き返ったので、天皇がやがて都へお帰りになる吉兆だと喜びます。そこへ追手が迫りますが、夫婦は岸に干してある舟の下へ天皇を隠し、敵をあざむいて追い返します。天皇は老人夫婦の忠節に感謝し、身の拙さを嘆かれるので、夫婦も涙にむせびます。やがて、夜もふけ静まり、夫婦は何として御心を慰めようと思ううちに、妙なる音楽が聞こえ、老人夫婦の姿は消え失せます。かわりに天女が現れ、舞を舞い、次いで蔵王権現も出現し、激しく虚空を飛びめぐって、天皇を守護することを約し、御代を祝福します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

すなわち姿を現わして。すなわち姿を現わし給いて。天をさす手は。胎蔵。地をまたさすは。金剛宝石の上に立って。一足をひっさげ。東西南北十方世界の虚空に飛行して。普天の下率土の内に。王威をいかでか軽んぜんと。大勢力の力を出だし。国土を改め治まる御代の。天武の聖代かしこき恵み。新たなりける。奇瑞かな。

猩々（しょうじょう）

【分類】五番目物（祝言物） *中ノ舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：猩々（面・猩々）

【あらすじ】（連吟の部分…下線部）

親孝行で評判の高い高風という男が、揚子の市で酒を売ると富貴の身になるという夢を見、そのお告げのとおり酒を売って金持ちになりました。その高風の店に来て酒を飲む者で、いくら飲んでも顔色が変わらない者がいるので、ある日、名を尋ねると海中に住む猩々だと明かして帰って行きました。そこで、高風はある月の美しい夜に潯陽の江のほとりに酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。やがて、猩々は薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をみたい、よき友と会うことを楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽にのって、猩々は舞い出します。そして高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

【詞章】（連吟の部分の抜粋）

有難や。御身心すなおなるにより。この壺に泉をたたえ。ただ今返えし。授くるなり。よも尽きじ。よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども変わらぬ秋の夜の盃。影も傾むく入江にかれ立つ。足もとはよろよろと。酔に伏したる枕の夢の。醒むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。

弓八幡（ゆみやわた）

【分類】 初番目物（脇能） *神舞

【作者】 世阿弥

【主人公】 前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：高良ノ神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

後宇多院に仕える臣下が、男山八幡宮（石清水八幡宮）の如月初卯の神事に陪従として参詣するよう命じられ、八幡宮に向います。やがて八幡宮に着き、参詣しようとする、一人の男を伴い、錦の袋に納めた弓を持った老翁がいます。不思議に思っ
て尋ねると、老翁は「私は長年この八幡宮に仕えているもので、桑の弓を君に捧げよう
と思い、あなたを待っていたのです」と答えます。そして、桑の弓を袋に納めたま
ま君に捧げるいわれなどを詳しく語ります。さらに、八幡宮のいわれを語り、実は
自分は高良の神で、君を守るためにここに現れたと言い、かき消すように消えて
しまいます。

<中入>

臣下が神託を伝えるため、都に帰ろうとすると、どこからか音楽が聞こえ、良い香
が薫ってきます。するとそこへ、高良〔かわら〕の神がその姿を現し、舞を舞い、
御代を祝い、八幡宮の神徳を讃えます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

君を守りの御誓い。もとより定めある上に。殊にこの君の神徳。天下一統と守るなり。
げにげに神代今の代の。しるしの箱の明らかに。この山上に宮居せし。神の昔は。
ひさかたの。月の桂の男山。さやけき影は所から。畜類鳥類鳩吹く松の風までも。
皆神体と現れ。げにたのもしき神ごころ。示現大菩薩八幡の。神徳ぞ豊かなり
ける。神徳ぞ豊か。なりける。

蝉丸（せみまる）

【分類】 四番目物（狂女物） ＊カケリ

【作者】 世阿弥

【主人公】 シテ：逆髪（面・増髪）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

延喜帝の第四皇子、蝉丸の宮は盲目の身に生まれつきました。帝は、宮の後世を助けるため、清貫に命じて、逢坂山に捨てさせられます。清貫は悲しみますが、かえって蝉丸は、過去の罪業を償わせよとの父君の慈悲なのだ、恨み嘆く態度を見せません。清貫は宣旨の通りに、蝉丸を剃髪、出家させ、簀、笠、杖をおいて去ってゆきます。一人になると、蝉丸もさすがに淋しく、琵琶を抱いて泣き伏します。やがて博雅三位がやって来て、蝉丸を慰め、小屋を作りその中へ助け入れて、また見舞いに来ると言って、帰ってゆきます。蝉丸の姉宮逆髪は、その名の如く頭の髪が上に向かって逆さまに生え、そのため狂乱となっています。彼女は御所をさまよ
い出て、いつしか逢坂山へとやって来ます。そしてふと気がつく、近くの藁屋の内から妙なる琵琶の音が聞こえて来ます。不審に思って立ち寄ると、中から声をかけたのは、弟宮でした。姉弟は、互いに手を取りあって身の不運を嘆き悲しみ、また慰め合います。やがて、名残りを惜しみつつも、姉宮はいずこともなく去り、弟宮は見えぬ目で見送ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

花の都を立ち出でて。花の都を立ち出でて。うきねに鳴くか加茂川や。すえ白川を
うちわたり。粟田口にも着しかば。今は誰をか松坂や。関のこなたと思ひしに。あ
とになるや音羽山の。名残惜しの都や。松虫鈴虫きりぎりすの。鳴くや夕陰の山科
の。里人もとがむなよ。狂女なれど心は。清滝川と知るべし。逢坂の関の清水に影
見えて。今やひくらん望月の。駒の歩みも近づくか。水もはしり井の影見れば。わ
れながらあさましや。髪はおどろを頂き。眉墨も乱れ黒みて。げに逆髪影うつる。
水を鏡という波の。うつつなのわが姿や。

春栄（しゅんねい）

【分 類】二・四番目物（侍物） *男舞

【作 者】世阿弥

【主人公】シテ：増尾種直（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

増尾の春栄丸は宇治の合戦の際に捕われの身となって、伊豆国・三島の高橋権頭家次の陣屋につながれています。家次は春栄丸が自分の死んだ息子に似ているので養子にしたいと考えますが、既に斬罪の判決が下っていて今は刑の執行を待つばかりです。そうしたある日、春栄丸の兄・増尾太郎種直が家次の館を訪ね、春栄丸に面会を申し入れます。春栄丸は兄の来訪を喜びますが、肉親と知れては同罪になると恐れて、家来の者だと言い張ります。兄は弟と一緒に殺される覚悟で来たので、それでは情けないと言って腹を切ろうとします。ここに至って春栄丸も翻心し互いに名乗りあいます。委細を見ていた権頭は兄弟愛に涙を催します。そして種直に自分が春栄丸を貰うけたい由を話していると、鎌倉から囚人の断罪を命じられ、最期と覚悟をしていると、再び鎌倉より赦免が伝えられ、一同は喜び、種直は舞を舞い、春栄丸は家次の養子となって共に鎌倉に旅立ちます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

あずま路の。秩父の山の。松の葉の。千代の影そう。若みどりかな。若みどりかな。
若みどりかな。老木も若みどり。立つや若竹の。親子の契り。または兄弟。かれと
いいこれといい。いずれもいずれも睦ましく。親子兄弟と。栄うることも。これ孝
行を。守りたもう。三島の宮の。ご利生と伏し拝み。親子兄弟。さも睦ましく。う
ち連れて。鎌倉へこそ。参りけれ。

小鍛冶（こかじ）

【分 類】五番目物（略脇能＝鬼畜物、靈験物） ＊舞働

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：童子（面・童子）、後シテ：稲荷明神（面・小飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

一条天皇がある夜に不思議な夢を見られたので、橘道成を勅使として、当時名工として知られた三条の小鍛冶宗近に御剣を打つことを命ぜられます。宗近は宣旨を承りはしたものの、優れた相槌の者がいないので途方にくれ、この上は奇特を頼むほかはないと、氏神である稲荷明神へ祈願のために出かけます。すると童子が現れ、不思議にも既に勅命を知っており、君の恵みによって御剣は必ず成功すると安心させます。そして、和漢の銘剣の威徳や故事を述べ、特に日本武尊の草薙剣の物語を詳しく語って聞かせ、神通力によって、力を貸し与えようというて、稲荷山に消えていきます。

<中入>

宗近は、しめ縄を張った壇をしつらえ、仕度を調べて、祝詞を唱えて待ち構えます。すると、稲荷明神の使わした狐が現れ、相槌となって御剣を打ち上げ、表に小鍛冶宗近、裏に小狐と銘を入れ、勅旨に捧げると、再び稲荷山に帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

天下第一の。天下第一の。二つの銘の御剣にて。四海を治めたまえば。五穀成就もこの時なれや。すなわち汝が氏の神。稲荷の神体小狐丸を。勅使にささげ申し。これまでなりと言ひ捨ててまた。むら雲に飛び乗り。またむら雲に飛びのりて東山。稲荷の峰にぞ。帰りける。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かつら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキー人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>